

スピノザ (Baruch De Spinoza, 1632-1677) と人新世 (Anthropocene)

学校の授業などではスピノザの思想を要約する時に「汎神論」という言葉が使われます。「汎神論」とはいったい何なのでしょう？ 字面だけからすると「世界の至る所に神様がいる」と言っているみたいに思えます。それだとまるで日本の「八百万の神」みたいな世界観ですが、それはスピノザとは関係ありません。

スピノザ哲学の核心は「神＝自然」ということです（この意味で「汎神論」と呼ぶなら間違いではありません）。汎神論は無神論ではないのですが、神についての伝統的な考えからすると、明らかに異端です。とりわけユダヤ教やキリスト教、イスラム教のような一神教においては、神は（人間を超越したものとはいえ）一種の人格を持っており、自然を創り出し、支配している存在だからです。その神様が自分の造ったもの（被造物としての自然）と同じなんてもってのほか、結局は神の存在を否定しているのと同じ、ということになります（だからスピノザも命を狙われました）。

一神教的な神とは、いってみれば〈精神的なもの〉の極致です。それが物質である自然と同じということは何を意味するかというと、神の似姿として〈精神的なもの〉を分け与えられている人間も、物質／自然と同じということになります。つまりスピノザ哲学を徹底すると、精神と物質、人間と自然との間に存在論的な区別はなく、人間はその精神も含めて自然の一部になってしまいます。こうした思想は、伝統的な宗教的立場から見ると無神論、唯物論であり、危険思想とみなされます。

現代人はもはや宗教にとらわれていないのだから、スピノザ的に世界を見ているかということ、けっしてそんなことはありません。たしかに伝統宗教の権威は弱まりましたが、私たちは依然として〈心／精神／神〉と〈物質／機械／自然〉との基本的対立を前提しています。たとえば「人工知能は本当に考えている（あるいは意識を持っている）のだろうか？」というような問いを私たちが発する時、その背景には伝統宗教と同じ形而上学的対立が、あたかも自明のこととして前提されています。こうした問いは、要するに「機械が心を持ちうるのか？」という問題に帰着します。一方スピノザにとって、こんな問いはそもそも意味を持ちません。心とは機械だからです。

しかしこの「機械」は、人間が観察したり作り出したりする機械と同じものではありません。ここがスピノザ哲学のちょっと難しいところなのですが、スピノザはこの世界を、まるで神様が見ているかのように見ているのです。『エチカ』という本は聖書のような啓示ではなく徹頭徹尾合理的な、幾何学のような公理、定理、証明で出来ているのですが、にもかかわらず、まるで神ご自身が書かれたテキストのような印象を受けます（だから面白い）。スピノザは神様ではなく人間です。しかし神＝自然であるならば、その一部である人間もまた神的であるとも言えます。人間がいかにして神的になりうるかということ、それは知によって、合理的思考を徹底することによってです。

人間の過ちや愚かさはどこから来るのか？ スピノザによれば、それは人間の宿命的な限界や悪徳から生じるのではなく、無知から来るのです。無知というのは、自分がなぜこんな風に考えるのか、自分はなぜこんなことをするのか、その本当の原因を知らないという状態のことです。スピノザ哲学においては、〈悪〉はそもそも存在しません。すべては「無知」に起因します。この点においても、「原罪」と「救済」を主張するユダヤ／キリスト教とは相入れません。苦悩の原因

としての「無知」はむしろ仏教的な「無明」に近いとも思えますが、仏教において「無明」から脱する契機である「智慧」が、いわば全身体的直観のように思えるのに対して、スピノザ的な「知」は合理的思考の徹底である点が異なります（が、究極的には同じものかもしれないとも思います）。

さて「人新世」というのは、きわめて新しいアイデアであり、用語です。パウル・クルツェンというオランダ人の大気化学者たちが、2000年頃から提唱したもので、出来てからまだ25年くらいしか経っていません。「人新世」とは何か。それは地質年代の新たな名前の提唱です。地球の歴史を区分する地質年代で最も現在に近い時代（最後の氷河期が終わる約1万年前から現在まで）は、これまで「完新世 Holocene」と呼ばれてきました（それ以前は「沖積世 Alluvium」と呼ばれていました）。それをどうして「人新世」と呼び直すかというと、この時代にはじめて人類の文明活動が地球環境にまで影響を及ぼし始めたのではないかという考え方が説得力を持ちはじめたからです。

もっとも「人新世」は地質学や地球物理学で正式な名称として決定したわけではなく、二酸化炭素による地球温暖化など環境問題に関してしばしば引用されます。しかも「人新世」がいつ始まるのかについても定説があるわけではなく、1万2千年前の農耕革命以降という人もいれば、産業革命以降、あるいは1960年代以降など、いろんな解釈があります。1960年代以降だとまだ半世紀ちょっとしか経過しておらず、地質年代として意味を持ちうるのか疑問です。人間は自分に近い現象ほど時間的にも空間的にも拡大して考える傾向があります。文明など地球の歴史ではほんの一瞬（1年間のうちのたった1分）であることを忘れてしまうのですが、これもスピノザ的に言うなら「無知」です。

核兵器を廃絶するために、人類が保有している原爆や水爆をすべて太陽に捨てたら？ というような空想があります。そんなことしたら太陽が爆発してしまうのではないかと心配する人がいるかもしれませんが、太陽における核融合反応は、人類が持つすべての核兵器の爆発力の、数千万倍から1億倍のエネルギーを毎秒放出しています。だからたとえ核兵器の太陽廃棄ができたとしても、山火事にマッチを一本放り込むようなもので、何も起こりません（そもそも爆弾は先に溶けてしまって爆発もしないでしょう）。さてこの太陽の莫大な核エネルギーの5兆分の1程度が地球に到達して、その中のさらにごく一部が、人類の文明活動も含む生命活動を支えているわけです。私たちは毎日ご飯を食べて生きていると思っているが、元をたざせば太陽の核融合で動いているのです。

地球温暖化がよく話題になりますが、温暖化の原因は文明活動による二酸化炭素放出だけではなく、太陽の活動、地球の自転、大気の状態、海洋水の移動など様々な原因があります。人類文明の影響がそうした地球規模、宇宙規模の現象に対してどれほど意味を持つのかについてはさまざまな解釈があり、定説というものはありません。つまり地球温暖化については「分からない」というのが合理的な立場です。にもかかわらず地球温暖化は「定説」であるかのように語られます。分からないことを分かっているかのように語るのには「無知」です。私たちはこうした「無知」に影響され、右往左往しています。

「人新世」という考え方の背後には、人間と自然とを対立したものとみる、素朴な哲学的信念があると思います。そうした単純な対立は私たちの常識の中にも潜在していますが、それこそ、スピノザが乗り越えようとした思考の足枷です。スピノザは西洋の哲学者ですが、精神と自然とを同一視する思想は西洋的ではなく、そもそも西洋／東洋という枠組みには収まりません。